
とあるダンジョンからの脱出

莎月 双樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるダンジョンからの脱出

【Zコード】

Z5201S

【作者名】

莎月 双樹

【あらすじ】

あるダンジョンからの脱出を試みる、私、「ヤツ」にだけは見つかるわけにはいかないので。培つた勘を精一杯働かセルートを選んでいく。しかし、そんな努力も空しく……。

(前書き)

文中にセクハラ表現があります。

‘とある’と付いていますが、やっぱり独立した話です。他の
関連はありません。

そこは薄暗い場所だった。

仄かな光が足下を照らしてはいたが、見通しはあまり良くない。慎重に一步ずつ、階段を下りていく。

最後の一歩を下りたところで、私は足を止めた。

田の前にはまっすぐ前に続く通路と、右に進む通路。さらに左手には下の階に続く階段。

田の出口まであと2階。でも、だからと言つてこのまま階段を下つることはできない。……このダンジョンはそんな単純な構造でないことはよく知っている。

階段は、おそれく罠。私の、これまでの経験から培つてきた勘がそう告げている。

ならば真っ直ぐか、右か。

どちらの通路も弱い光が数メートル毎に足下を照らすのみ。今日は満月のはずだが、窓の無い通路に光は届かず、通路の先がどうなつているのか、本当に見通せない。

どちらかダミーの方は、進んだ先で行き止まりになつているはずである。しかし、行つてみて通れないなら戻れば良い、というわけにもいかないのが、口の恐ろしさといふ。

正しいルートを外れてうろついていると、警報が鳴つてしまつかもしない。そうなつたらアウト。しかし、かと言つて同じ所で立ち止まつているわけにもいかない。

ぐずぐずしてこるとヤシが出てくるのだ。

ヤツにはあのダンジョンマスター（仮称）にだけは、捕まるわけにはいかない。捕まつたら最後……。

「Jの手に握るのがどんな魔をも滅する聖剣であればどんなに心強いことか……」そう思いながら左肩に掛けた鞄の紐を両手で握りしめ、意を決して私は右足を一步踏み出そうとした。　その時。

「みかみさん、はつけん」
右の耳元に、低く囁かれた声。

口から漏れそうになつた悲鳴は両手で押さえ込んだものの。

心の中の呟ぎは止まらなかつた。

私は三上静子、クリスマス、も過ぎた26歳、見た目で学生に間違われることも多いけど、が事務職の派遣社員として勤める会社は、一風変わった夜間警備の方法をとっている。

地上10階、地下3階の自社ビルのうち、2階から8階をオフィスエリアが占めており（ちなみに1階は玄関ロビーと警備室以外は独立したテナントで、地階は駐車場）、地上各階のレイアウトは基

本的に共通。ほぼ正方形のフロアの四隅に階段。階段以外の窓際四方が事務室や会議室など。その内側に日々の字形に通路があつて、真ん中の「の字の上下に各3基、計6基のエレベーター。エレベーターの裏側の通路沿い、窓際とは反対側のスペースにトイレや更衣室等がある。

……どう見ても迷うような間取りではない。

それが、午後6時を過ぎると様相が一変してしまう。

エレベーターの自動運転が解除され、各階各所の防火シャッターがランダムに下りてきて内部を仕切つてしまい、迷路と化してしまうのである。……いや、ホントに。

この会社のむしむしたつての終業時間は午後5時。残業等でビルを出るのが6時以降になる者はパソコンのシステムを使って事前にその旨を申請しなければならない。申請は所属の課長の承認を経て警備部へ連絡され、申請者の端末に退勤時のルートが伝達される。

退勤ルートへのアクセスは一回きりで、しかも毎日異なるという念の入れよう。

……いぐり会社の主な商品が、情報、だからって異常でしょ、これ。

考えてもみてほしい。4階の人間が1階の警備室脇の時間外出入り口へ行くのに、東階段から6階に上がり、北東、中央、南西通路を経て西階段から7階へ行き、北西通路から中央通路の1号エレベーターで3階へ、さらに北東、南東と通路を回り込み、5号エレベーターで2階へ……

……

やつてられるか！

（ちなみにこれは、極めて珍しく私が1回だけ残業したときの、脱出、ルートだつた。）

誰だ、んな暇なこと考えるヤツつて思ひでしょ？

変態に違いないつて思うでしょ？

そんな変態とお近づきになりたくないつて思ひでしょ！？

…………その変態が、ただいま私を捕獲中の警備主任サマで「なぜいます。

いいいやああああー！

はあなあしいてええーーー！

じたばたもがくけれど、142cmとただでさえ小柄な（チビ言うな！）私が頭二つ分も高い成人男性から抱え込まれると、無駄なあがき、にしかならないという……。
ゼエー、ゼエー、…………息が切れました。

…………アレ？ そういえばなんんくで後ろから抱え上げられてるんでしょうが？

気がつけば、ふにふにお腹 ほつちやり体型で体重もしつかりさんじゅうもによキロあるのです に骨ばった手がふによつと食い込んで、空腹な胃を刺激……イヤイヤ、ちょっと痛いかもなんですか。足も地面に着いてなくてフリ～ンな状態……。

さすが殿方、力お強いですね～……じゃなくて、ここは相手の脛すねを蹴つて逃げるトコロ？

思いついてはみたものの。

「蹴られても放しませんから、無駄な抵抗はやめましょうね～？」
心中を見透かされたかのよつたな相手のセリフに敢えなく断念。
あううう～。

おとなしくだらりと力を抜いて抱えられたまま、連行・尋問が始まるのを待つ。

ああ、またあのパイプ椅子で
「三上さん、我が社の業務規則理解されます?」とか。
「これで何度もだと思ってるんですか?」とか。
嫌みとお説教を延々聞く羽田になるんだろうなあ。
それを思つと、思わずはあ～、とため息が……。
うえ、息吐いたら主任の手がいつそお腹に食い込んじゃいまし
たよ。

……ふにふにふに。

……ふにふにふに。

「あの～」
「なんですか?」
「どーして人のお腹もみもみしていらっしゃるんでしょうか?」
しかも両手で。
「いやあ、あまりにも良い感触なので」
「ありがとうございます……うへ～」
あまりに堂々きつぱつ言わってしまったので思わずお礼を言つてしまつたけれど。
あれ?それってお腹のゼイニクがスゴイヒヒヒヒスゴ...ネ
??

さらなるダメージを受けてガツクリです。

ふにふにふに。
ふにふにふに。

……しかし、長いデスね、主任。

「すみません」

「なんでしょう?」

「そろそろ警備室に行かなくていいんですか?」

3階の階段で警備主任サマに後ろから抱え上げられてお腹揉まれ続けるのも飽きました。一仕事、いや二仕事して疲れているので早く帰つてご飯食べて寝たいです。むつきから刺激を受けているので尚更、空きつ腹と食欲が訴えかけてます。

「うーん、でも二十分本当の事話してくれないでしょ?」
ぎくぎく。

「ナンノコドデシヨウカ」

「無届けで残つている理由ですよ」

「エー、ソレハデスネ~」

「時計が止まつていて気づかなかつた」、「気分が悪くて保健室で横になつていて、トイレの鍵が壊れて閉じこめられた」、「休憩室でうたた寝した」、という理由はもう使えませんからね」
「おおつ、おおつ、これまで使い回してきた言い訳が!」

「……更衣室のロッカーの扉が

ならばと新たな手を繰り出してみたものの、
「ちなみに今回、全階のトイレ、更衣室、並びに保健室、休憩室、食堂にあなたが居なかつたことは確認済みです」

絶対防御の壁に阻まれました。

「イヤ、デモ、ホラ、ワタクシグンニココニヤマスシ……」

抵抗を試みるも

「だからおかしいんですねえ」

お腹に回された手　いやもう腕？に力が込められ、やがて引き寄せられる。

「うえ、藪蛇？藪をどつこちやつた！？」

「こつたい、どうじうことなんでしょうかねえ、三上さん？」

「どうと言われましても言えません。
言えるわけないです。」

異世界行つてます
なんて。

月齢15・9の日の17時09分（午後5時09分）、私は召喚され、異世界へ行く。

なしてそーいうコトになつたかは……まあ、いろいろあります
割愛（察してください・泣）。

異世界行つて何をするかといつと、「天を支えるの柱の塔の宝珠への魔力の補充」というやつです　簡単に言えばだけど。

簡単じゃないのが、塔の中は迷路状になつていて、塔の上層階には結界が張られていて魔力の供給者しか進めないこと、結界の中にはガードマン代わりの魔物（中ボスクラス）が彷徨いでいること、そして、私が剣や魔法が一切使えないこと。

……魔物さんを避けながら迷路を突破して「ゴール（宝珠）」を目指すのである。勘も鍛えられるといつものだ（ちなみに、みつしょんくじあー、まで帰れない）。

しかし……

……「こんなこと言つたら「なにこの人、頭オカシイんじゃないの?」って思われますよね?

アブナイ人と思われて仕事クビになっちゃいますよね!?

ただでさえ立場の弱い派遣なのに、悪評立つたら仕事無くなっちゃいます。そんなことになつたら、私の野望 老後は限界集落に安く広い土地家屋をゲットしてラブリーわんこ＆にゃんこに囲まれて晴耕雨読ライフ がパーです。

召喚したその時間に帰してくれれば良いのに、法則がどーとか言つて、17時09分召喚の19時09分帰還といつのは変えられないこと。

終業時間が17時なのに、9分で机の上を片づけて制服を着替えてビルの外の人目のつかないところへ 光つて消えるところを見られたら騒動になるからね なんて、無理でしょ!

いつそ派遣先を変えてもらおうと派遣会社に相談したのだけれど、なーぜーか「人を変えるなら会社を変えるつて言われちゃつてねえ、そうなると派遣先も減るわけだから紹介も難しくなると思うんだよねえ」なんて言われてしまい、已む無くこの会社に居続けている次第。

……私が雇用主なら就業規則守れんような派遣とつと変えるよ?

……しかし。

ふにふに。
ふにふにふに。

ホントに飽きないんでしょうか、この方。
セクハラ指摘しても良いのだが、就業規則破つてир負い日もあるし。それに実はけつこう気持ち良いのですよ、コレ（イタ気持ちいいってやつ？）。脂肪揉み出し、みたいな？

とはいへ、年頃の女が30歳前後（見た目推定）の殿方にお腹揉まれているこの光景を第三者に見られても厄介なので。

「あのう、本当にいつまでそうしているおつもりでしょうか？」

‘そろそろ止めませんか～？’、なーニュアンスを含む質問をしてみる。

しかし、

「う～ん、やっぱり女の口は柔らかいのが一番ですよね～」
返ってきたのは質問の答えになつていかない言葉。

「は？」

「今時の口つてダイエッタダイエッタで痩せちゃつてんしさ、美味しくないよね、アレ」

いや、そんな同意を求められても……。

「その点、三上さん柔らかくつて美味しそうだよね
いや、そんな美味しそうつて言われましても……。

「手触りだけど赤身と脂肪のバランスが僕好みなんだよね
ナンデスカその、まんま、肉の品定め、なオコトバは、塔の魔物
を連想しちゃうじゃないですか……はつ～！」

もしや本当に魔物……？

いやいや、ナニ考てるんだ、私！

突飛な考え方を振り払おうと首をふんふん振つてゐる

「まあ、確かにいつまでもここに居るわけにはきませんし……」
話題的には急転換ながら、ともあれ、よつやく移動する所になつてくれたようだ。

「……記念すべき7回田なので、上の僕の部屋に行きましょっか

おこなうまでこつ……

心中のシシ パリの激しさとは裏腹に、

「あの～、下の警備室に行くのではないんでしょうか？」
あくまでも下手に出来る私（何度も言つたが、立場の弱い派遣なんですよ……）

「どうせなら、少しふり味わえるといいがいいじゃないですか

いやいや、味わえるってなんか違うでしょ？

つてか、いくら人が小さい（屈辱！）からって小脇に抱えるのは
どーかと思いますよ？

しかも軽々と？

……くつ、細く見えてるよせじ、それは隠れマッショか！

「役目上10階に部屋をもらつてるので、ここでゆつくり堪能せ
てもらいますね」

私の体重などものともせずにスタスタ歩く足取りに、マジで冷や

汗が……

最上階に棲家？

実はボス級？

いやいや、こつちに魔物はイナイイナイ……いない、ハズ。

「ほら、でももう遅いです。私も帰つて休みたいな、なんて」
万に一つの望みを込めて言つては見たものの
「使い心地の良い大きなベッドがありますよ、何なら一緒に使って
みますか？」

あつさりスル。

寝心地じゃなく使い心地つて何だよ！

「トンデモゴザイマセンツツシンデゴジタイサセイタダキマス」
「そんなに警戒しなくつたつて、まだ喰つたりしませんから」
「まだ、つて何、まだ、つて！いつか喰う気は満々か！？」
「ニツコリ、微笑んだつて逆にコワイよ、肉食獣にしか見えない
よ！－

事じこに至つてさすがに身の危険を感じ、改めて逃げようともが
く。

命あつての物种、死んで花実が咲くものか！
たとえ派遣をクビになり人生設計を見直すことにならうとも、喰
われてしまつては元も子もないのだ。

晴耕雨読のわんにゃんハーレム生活という人生の目標のため、私
は戦う！遠回りに見えようとも、これはそのための戦略的撤退！－

しかし。
しかし。

そんな私の必死の抵抗も空しく。

「やれやれ」と呟いた警備主任サマは、人を脇抱えから再度前抱
きに抱えなおすと、後ろから耳元に

「そんなに今すぐ喰われたいんですか？月齢15・9の17時09
分に失踪のみ・か・み・サン？」

と、これまで聞いたことの無いような、艶を含んだ声で囁きやがり
クダサッタ。

ばれてる、ばれてマスヨ！

なにこのスキルっ！ くつ、このホトコ、ダンジョンマスターじゃなくて実は魔王だったとかいうオチ？

第三章 中国古典文学名著与现代传播

あたしは村人Aだ——つ！！姫でもないのに攫つてどーする——

という私の叫び声と。

やつぱつニ上れんは愉快ですねー、はつはつはー、とかなんとか

エレベーターホールに響き渡った後、連れ込まれた箱の中、自動扉に遮られて消えた。

Game Over?

(後書き)

最後までお読みいただきありがとうございます。

自分で書いておきながら何ですが。
こんな職場あつたらイヤですね。
只でさえ残業で疲れてるんだからひとつと帰りたいです。

相変わらずの莎由の妄想話でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5201s/>

とあるダンジョンからの脱出

2011年4月18日02時30分発行